

令和元年度（2019年度）熊本県第1回総合教育会議 議事録

期 日：令和元年（2019年）10月10日（木）

時 間：10：00～11：30

場 所：県庁本館審議会室

出席者：蒲島 郁夫 知事、古閑 陽一 教育長、木之内 均 教育委員、
堀内 忍 教育委員、吉井 恵璃子 教育委員、櫻井 一郎 教育委員

議 題：「本県教育行政の今後の重要施策」

※開会あいさつ省略

※事務局資料説明省略

【古閑教育長】

ありがとうございました。それでは、一つ目のテーマ「『夢』を育む～確かな学力の向上と世界にはばたく人材の育成～」につきまして、ただ今の資料の説明に関してのご質問でも結構でございます。自由にご意見をいただければと考えております。

【蒲島知事】

私から。英検の3級程度の英語力を持つ中学生の28年度は全国最下位だったけども、20位まで伸びたと言うことですが、それは何が一番大きな要因ですか。

【古閑教育長】

事務局の方から。

【古田課長】

失礼いたします。義務教育課長の古田と申します。弘済会というところから補助をいただいているおかげがございまして、毎年700人程度の子どもたちに補助を続けてまいりました。そのことによって、普段はチャレンジをしていなかった子どもたちもチャレンジをしてみようという意欲を喚起できたことが一番の要因ではないかという風に考えております。

【古閑教育長】

ありがとうございました。

【蒲島知事】

これはやれば出来るということ？

【古閑教育長】

そうです。もう少し全国平均まで差がありますので、それを超えるくらいの気持ちで今取り組んでおります。今年から県で直接の補助も市町村に対してできるようになりましたので、なお一層の充実を図れるように取り組んでまいります。他には何かございますでしょうか。はい、どうぞ木之内委員。

【木之内委員】

今、20位まで伸びたという事、やっぱりこの熊本、今、知事のおかげでインバウンドもだいぶ増えて、非常にグローバルになってきたとは思いますが、やはり地方に住んでいて、一番思うのは海外に対する根本的な興味がやはりちょっと少ないのかなあという感じがあります。それは県が悪いとか、そういう意味ではなくて、むしろ年配の方々自体が全く海外に対してあんまり認識がないという傾向があるような気がするんで、やっぱり自然に子ども達も目が遠ざかって、そういう意味ではやっぱり海外の面白さとか、色々なそういった事みたいなのを、低学年のうちから、色々な形で、どう伝えるか。今BSですとか、色々な意味でテレビではやってますが、むしろそういうものが身近でやってるがゆえに興味を持って見ようとするっていうのではなくて、逆に当たり前になりすぎて本当の興味を持たないみたいなのをちょっと感じるんで。何か我々はハワイ旅行でもできたらすごい事だ、みたいなそういう憧れがあったんだけど、逆に僕は今の子どもはそういう海外に対する憧れが減っちゃってるんじゃないのかなっていう気がちょっとしないでもないんで、是非ですね、低学年とかを含めた若い小学校のうちぐらいに、そういう面白さを伝えられるような、カリキュラムというか、仕組みみたいなものがあると、色々な意味で興味につながるのかなあなんて事をちょっと感じています。

【古閑教育長】

はい。堀内委員。

【堀内委員】

今の木之内委員がおっしゃったのがまさしく私も感じていたことで、今ほんとにラグビーで日本中が沸いてると思います。熊本にも、フランスチームとか、あとウルグアイのチームとか色々な外国の選手の方がいらっしゃってます。その中で、やはり、もちろん学校のカリキュラムでそういう事を、盛り

込むっていう事も大事だと思いますが、まさしく外国人選手だったり、外国の文化っていうものを近くで感じられるような、そういう招致っていうことをしていく事も大事かなって思っています。特に今ほんとにラグビーは、大人から子どもまで大興奮で、みなさん興味を持って見てらっしゃると思うので、やはり何かきっかけですね、興味を引く、子ども達が何か「あ、これ面白い」とか「あ、この人達すごい」というそういう所から海外に興味を持つっていうこともとても大事だと思いますので、是非そういうような招致も頑張っただけだと熊本がもっともっと盛り上がって、子ども達がもっともっと海外に目を向ける、チャンスというかそういう場が設けられるのかなって思っております。

【櫻井委員】

すみません。このレジュメは一つひとつ、何かこう返答するってあれではなくて、もっと骨太にと思っておりますので、例えばこの一人一人っていうのがほんとにできるのか、例えばそれよりも20人学級にした方がいいんじゃないかと色々意見はあるんですが、先程のあれからいきますと、やはり熊本県としましては、この夢を育む、広げる、支えるということなんですけど、今日のノーベル賞の吉野先生がおっしゃってましたように、やはり夢のきっかけが大事だったと。『ろうそくの科学』というのを読んで科学をやってみようと思われたという風にありますけど、やはり子ども達は何がきっかけで夢を見つけるのかっていうのは分かりませんので。例えば具体的な話しますと、例えば、熊本の先輩を呼んできて話をしてもらおうとか、知事に学校に行ってもらってどんどん講話していただくとか。あるいは、会社の見学をどんどんさせるとか、海外留学をさせるとか、教科書だけじゃなくて、やはり夢のきっかけになるような、そういう心に残るイベントをどんどん学校の授業の中に入れていって、そして今日何が何に感動するかやっぱ我々はもう分からないところがありますので、どんどん鉄砲を撃つような形で子ども達に刺激を与えるような環境ができればという風に思っております。以上でございます。

【蒲島知事】

今ラグビーの話が出ましたけれども、私はとてもチャンスがあると思うのは、ハンドボールが96試合行われるんですね。一校一國、応援の制度っていうのができてますけども、これを形骸化させずに本当にその国のことを学ぶと。そういう機会にしてほしいと思いますよね。そのことで応援にもまた力が入ると、そういう海外のこう一つの接触のチャンス、これがとても大事なような気がします。

A L T もやっぱりこれは、ほとんどの学校に配置されるようにしないと、だんだん取り残されていくと思いますね、それ配置されてないところは。海外への機会、チャンス。それで是非ハンドボールを頑張ってやっていただきたいなと思います。

【古閑教育長】

はい、ありがとうございました。

知事からお話がありましたけど、ハンドボールにつきましても今子ども達が直接試合を見に行く数がもう8万人を越えるぐらい、今そういう取り組みを進めようとしておりますので、ぜひ生の試合を見て実際、国を応援していただく中で、国の理解もより一層深まるんじゃないかなと思います。あと、櫻井委員の方から刺激の話がありましたけども、非常に大事な指摘じゃないかという風に思っております。知事もいろんな形で今出前講座にも行っていただいてもすけど、どうでしょうかね。

【蒲島知事】

初年度、最初の就任した時から比べると頻度が落ちてますよね。ほんと毎週のように最初の間は行きよったので。だから小学生、中学生の方が反応が良いんですね。小学生が多分、いいんじゃないかなと思うので、また是非その機会を設けていただいて、他の行事から知事の出前講座を再開する、学校の方のなんていうかこう熱意をね、最初の頃に比べてみんな忙しくなったんでしょうね。忙しくなったんじゃないかなと思います。

【古閑教育長】

ありがとうございます。

【木之内委員】

知事もほんとお忙しくてなかなかあれでしょうけども、ここにある熊大等の留学生との事ってということで、僕も今ちょっと大学にいて思うのは、案外留学生が孤立してる。日本の学生さんの特徴なのかもしれないけど、せっかく来てるんだから友達になればいいじゃんって思うんですけど、なかなか留学生と日本の学生自体との交流も思ったほどないですよ。全然ないわけじゃないんですけど。だから、逆にほんとうこういった留学生なんか結構時間があるんで、もうわざとですね、それこそ知事程人気になるかは別として、出前授業じゃないですけど、自分の国の事を話しに来てもらうとか、とにかくそういう機会を増やすことの大事さがあるんで。そうするとまた留学生にとっても何か自分たち

が来た地域でためになってるって思ってもらうことはすごく良いことですし、地域を知ってもらうことにもなるんで、何かもうちょっとこう具体的な形で強めて、具体的な策みたいなのを練ってみたらどうかなあということを思います。

【古閑教育長】

ありがとうございます。

【吉井委員】

すみません。学力調査の件なんですけれども、これを上げるという事はつまり平均点を上げるということになります。成績上位の生徒さんを伸ばすことも大事なんですけど、下位の生徒さんの底上げをすることの方が多分、簡単と言ったらいけませんけど、やりやすく、そして下位の生徒さんの夢を育むことになるんじゃないかと思います。その意味では、その資料にあります、確かな学力向上の大きな1番の(2)、(3)にあります、課題のある学校への支援検討、そして一人ひとりの理解状況を分析するというのはとても大事なことではないかと思います。学力はおそらく、ここでは私が勝手に思っているんですが、個人が自信を持ってこそ伸びるものだと思います。成績が上がって更に自信がつく、自信がつくからもっと勉強する。その繰り返しの中で伸びていくものではないかと思いますので、仮に自分が低いところにいると思っている子に対しては丁寧な指導をしていただいて、まず自信を持たせて、そしてさらに伸ばしていくということを考えていただくのがとてもいいんじゃないかなと私は思っております。

【古閑教育長】

ありがとうございます。櫻井委員からさっきお話がありましたけれども、経済界とか産業界からも今出前講座っていいですか、色んな形でご協力をいただいて学校現場に来ていただいております。なお一層ご協力いただいて学校現場でもより多くの生の声を聞かせていただく機会ができればというふうに思っております。

【櫻井委員】

小学生なら小学生ってターゲットを決めていただくと、逆に教材とか作りやすいんですよ。高校生に出す教材と小学生に出す教材は、工夫がいりますので、そこも決めていただくとやりやすいんじゃないかなと思います。変な話ですけど、うちでやってますが、くまモンのブックエンドを作ってもらいます。全部レーザーで切って、くまモンの形をしてるんですが、最後にブックエンドで

すから立たなきやいけないんです。ここの立てるところをコンコンコンコンコン叩いて作って、くまモンのブックエンドが出来て楽しそうに持って帰りますが、楽しそうにやって、そのかわり怪我しないようにどうするかって色々と挟む器具を考えたりしたんですね。そうやって、ぜひターゲット決めていただいて。

【蒲島知事】

それからくまモンという財産が熊本にいますから、教育の現場で最大限活用されたらどうかなって思うんですよね。先生たちもそしたら楽しくなると思う。さっき言ったように底上げの動きなんか、そういうのね。くまモンの活用策も。

【木之内委員】

昔ちょっと、冗談半分で、くまモンジュニア作って英語しか喋れなくして、回ったらみたいな話もちよっとは出たけど、なかなかやっぱり、パテント問題とかいろんな事の中で、そう簡単にはいかないですけども、何かやっぱり食いつきが確実にくまモンの力っていうのは絶大なものがあるので、やっぱりそういうものをまさしく英語教育だったりとか、工夫ができると面白いと思うんですよね。今、くまモンは喋らないもんだから。

【蒲島知事】

だから喋らなくても国際化できるということね。そういう意味では、やっぱり外国に対する興味もそうでしょうけども。ジェスチャーだけでも、ちゃんとやっていけるっていう。アイデアも、奥さんに子どもが生まれて英語しか喋れないっていうくまモンも将来的には。

【木之内委員】

あと、ぜひ、今櫻井委員のおっしゃられていた出前授業みたいな形の産業界の。こういうのを僕は先生方の研修会でできるだけ、増やしていただけたらと思いますね。やっぱり先生方自体に一般社会がどうなってるかをできるだけ機会を多く伝える場があると生徒さんだけではなくて。その辺も一つ、もちろんやれる範囲はあるでしょうけれども、ぜひ。

【古閑教育長】

学校現場ではそういう機会を作るっていうのは、十分今後もできるっていう理解でよろしいでしょうかね。

【古田課長】

義務教育課でございます。十分機会を作ることは可能かと思っておりますので、どうぞよろしく願いを致します。ありがとうございました。

【古閑教育長】

テーマが3つありますので、とりあえず今の1つ目のテーマは、また後ほどご意見があれば併せてということで2つ目のテーマに移らせて頂きます。2つ目のテーマは「『夢』を広げるという事で、県立高校の未来を考える。そのあり方と特色づくり」という事でございます。事務局の方から説明をお願いいたします。

※事務局資料説明省略

【古閑教育長】

はい、ありがとうございました。それでは2つ目のテーマ「『夢』を広げる～県立高校の未来を考える」ということで、そのあり方と特色づくり、また併せましてICTの活用による学校の活性化、地域間格差の解消、そういったテーマについて、少しご議論いただければという風に思います。よろしく願いいたします。

【吉井委員】

はい、吉井でございます。県立高校についてですが、学校は地域を支えるものだと思います。定員割れがそれぞれの地区に存在するようですが、それでも学校が地域を支える現状は変わっておりません。例えば熊本地震の前後で大きく変わったものの一つとして、学校は避難所になるという意識が生まれたことがあります。防災においても、とても重要なもので、定員割れが続いて、学校は不要じゃないか、高校が不要じゃないかという考えではないと思います。子どもが県内に住む以上、どこにいても同じ教育が受けられる状況でなければなりません。と同時に、学校は学校で子ども達に選ばれる学校でなければならないと思います。

そのためにあるのがこの特色、学校特色づくりになると思うんですが、これに関して私が知っている先生をちょっと紹介したいと思います。小学校なのですが、どうすればその人数の少ない学校に子どもが来るか、どうすれば地域に愛されるか、これを一生懸命考えて自分自ら地域に入って行って、色んな会議を学校で行うようにして、学校と地域の距離を小さくして、そして色んな制度を自分もすごく勉強されまして、色んな制度を学校に持って来て、その先生は

小規模特認校という制度を自分の学校に持ってこられました。そして、プールの裏の空き地を公園にして、地域に開放したりしてとても地域に慕われています。この学校は私の地元の学校なのですが、この十年ではじめて子どもの数が増えました。任期を何事もなく終わらせようという校長先生ならば、他の先生方も無気力になります。ですが、この校長先生のように色んな事にチャレンジする校長先生のもとでは、他の先生もすごく積極的で学校の色んな力を、新しい力を見せてくださいます。

今後、おそらく郡部で学校を維持するのは大変な時期になっていくんじゃないかと思いますが、「ひょっとしたらこのまま地元の学校がなくなるんじゃないか」という強い危機感を校長先生のリーダーシップの下、すべての教職員で持っていて、その中で一生懸命考えて考えて、動いて動いて、新しい特徴のある学校を作っていただきたい。危機感が大きければ大きいほどその中でいろんなアイデアが生まれ、その中で本当に素晴らしい活動ができるようになると思います。そして特徴をつけたうえで、そしてその結果をまずは皆さんには見て欲しいかなと思います。生徒が少ないとかそういう事のみではなく、どれだけ地域に愛されるか、地域が必要とするか、地域との距離を縮めるか、そういったことも学校の価値ではないかと思います。それを一つの特色づくりとして、学校の評価の一つとして加えていただければいいかなと思います。以上です。

【古閑教育長】

はい、ありがとうございます。

【櫻井委員】

吉井委員の考え方も分かるんですが、ただ、やはりこの次のページを見ても分かりますように、圧倒的に子どもたちの数が減ってるんですよ。数が減りますから、どんなに頑張っても定員は割れてしまいます。ですからやはり、定員割れをしない、ちょっと半分冗談半分本気なんですが、定員割れをしないためには定員を減らす、少なくすればいいですね。100人を50人にすれば割れということはないわけですから、そういう事も含めて抜本的にしなければいけないだろうと思うんですけど。やはり私立高校等の競争に負けてるとするのはちょっと問題ではないかなと。どうして私立に親御さんはやるんだろう、あるいは子ども達行くんだろうっていう事をよく考えて、例えば甲子園に行きたいから行くっていうのはあるかもしれませんが、そこをきちっと公立高校なりの特色を出さなきゃいけないという風に思います。ただ特色を出すという動きで、約50%は大学に進学するわけですから、やはり大学に進学がしやすい、どこ

でも好きな大学に行ける、好きな先生のいる大学に行けるという風な学力をきちっと教え込む高校。それともう一つは産業教育の高校がありますが、工業・商業・農業だと思っんですけど、このところはまさに特色が出せるかと思っますので。やっと3年ほど前ですか協議会ができたりして産業教育にすごい力が入ってきたんですけど、もう少し産業教育のこと考えて、こここそ私立に勝てることだと思っしておりますので、磨いていけたらなという風を感じております。

【古閑教育長】

はい、ありがとうございます。

【木之内委員】

はい、今、櫻井委員がおっしゃられた通りだと思っ、これ少子化を止めることはどうにもなんないんですよ。それで結局、僕はある程度、吉井委員がおっしゃられたように、地域ではやはり必ず高校は必要だっっていうのはもう当然のこと。それだったらですね、結局ある程度小規模校ありきでもって計画を立ててみる、地方の場合は。これは僕は学校の責任だけではないと思ってるんですよ、やっぱりこれだけ人口が減少してしまう、都市に特に若手の人が流れてしまう現状っっていうのは別に学校の責任ではなくて社会的なもう構造ですから、もうそこをどうこうっっていう、それを学校でひっくり返せっって言われても僕はかなり課題が大きすぎて難しい。そうであるならば、次へ考えるのはもう減ることを前提とした、まさしく小規模校で十分に教育もでき、特徴がありよかったっっていう学校っっていうのはどういう学校なのかっっていうのをまさしく現段階からしっかりと考えないと、手遅れになるっっていうのが僕としては非常に感じてます。

それともう一つは、やっぱり僕もちょうど委員長のときに最後の廃校に携わった者として、あれだけ熱を入れて残してくれっというパワーがなぜ日頃出ないのかっっていうのを非常に感じてます。特に僕が住んでる阿蘇でも、非常に今年定員（生徒数）が少なくて校長先生も副校長先生もご相談に来られました。僕はとにかく今から地域の人達との話し合いも含めてやった方がいいかなっという事で色々根回ししてこう色んな形でっという話をするんですけど、なかなか実行に移されないんですよ。僕はそこが学校側の忙しさなのか、それとも地域行政側のやっぱり一歩踏み出さないところなのか、よく分かりません。ですけど、ある程度教育委員会なり県なりとして、特に郡部の学校に対しては、こういう事を課題として日頃もうテーマに挙げて、色々な会議を持つ機会を作りなさいぐらいの、ある程度っという時間を作りあげていかないとこれ簡単に間は縮まんないんじゃないかなっというのをちょっと感じてます。

そういう意味でも、もちろん忙しいことは事実ですけど、ある程度もう数字は分かりきってるわけですから、相当本腰を入れてこの機会に次の一步に踏み出す、踏み出しておかないといかんというのを僕は非常に感じてます。

特に特徴づくりについても、やっぱり指導要領があって、カリキュラムがあって、シラバスがあるもんですから、基本的にそこを重視するというと非常に特徴を出しにくいんですね、学校側としては。これはもう教員の先生方のご苦労もよく分かります。だから、ある意味そういうものを突破して、例えば、うちでいえば結構有名なものもあるわけですし、(突破できた)事例あたりが何をもちえてそういう所を突破できたのかとか、こういう所を少し真剣に取り組んでみる。先程、吉井委員がおっしゃられた小規模特認校みたいなものっていうのがどういう制度で出来るものなのか、この辺のところは僕はある意味今回総合的にチーム作ってでも検討し、各校に下していく、タイムリミット決めて検討していかないとまず手遅れになるんじゃないかなというのを肌感として感じてます。

【蒲島知事】

定員割れっていう言葉が確かに、マイナス思考ですよ。これはどう考えても効率性を追求するための一つの指標のような気がします。でも今は効率性じゃなくて、それが状態なので、改めて小規模校のメリット、少ない人数で先生が立派だと私は学ぶ機会が多くなるので小規模校は良いんじゃないかと、むしろ。そこで様々なチャレンジを校長先生がして。県庁ではそこで「皿を割れ」って言うんですけど、学校の先生たちも皿を割れ精神で色々なことにチャレンジされると。そして最終的に小規模校の方が、みんな成績もいいし元気だなと。さっき言ったように熊本市内に出てこなくてもそこでちゃんと成績が伸びて大学に行けると。大体東大で見ていてわかりますけど、受験校から来たよりもそうじゃない高校から来た人たちの方が伸び率が高いんですね。そういうこともあるので、高校までに自分のエネルギーを使い果たしてしまうのではなく、エネルギーを溜めているというそういう教育も必要かなと思いました。

スーパーティーチャーの方々も定年になってそのまま役割を終えるのではなくて、スーパーティーチャーの方々が新たなチャレンジの場として小規模高校に行くと。そういう形で100歳まで生きる時代だから、小規模校あるいは地方の定員割れとか言わずに、教育重点校とかなんかプラス思考の名前がいいなと思って。スーパーティーチャーの定年後のあり方とかそういうことに関連してやっていただくと面白い試みになるのかなと思います。

【堀内委員】

すみません。先程から小規模校の話が出てるんですが、私が教育委員になっただけの時代。ちょうど高校の後期の再編の時でした。それで天草西校に見学とか学校訪問をしに行ったんですが、1学年で6人だったんですね。ほんとはちょっとその衝撃はとて大きくて。この6人で確かにお互い同士の信頼関係はとてしっかりと結ばれると思いましたが、果たしてこの子達はこれで社会に出た時に、これだけの人数でどのようにコミュニケーションを取っていくのかな。高校っていうのはもちろん大学進学ステップでもありますが、社会に出るほんとは最終的なステップになる子達もいるので、そういう事を考えると、やはり少人数のメリットっていうのは、先程皆さんおっしゃってたような、メリットもたくさんあると思いますが、やはりデメリットっていうところもあると思います。それで結局そういう少ない人数でコミュニケーションがあまり取れないってことになる、SNSだったりとか相手が見えない、そういう世界でのコミュニケーション力っていう事に頼る子ども達が多くなっていくのかなと思います。デジタル社会・デジタル社会って言いますが、やはりコミュニケーションっていうのは、人と人が顔と顔を付き合わせて初めてお互いのことを知るっていうところが大事だと思いますので、やはり、小規模校・少人数校というところで、考えるだけではなく、やっぱりその子達の先がどうなのかっていうところまでしっかり考えて検討をしていただきたいと思います。

それで、ここに一校一特色づくりの展開へってなってますけど、一校にこだわらなくてその地域ですね。一地域、一特色っていうような形で、もう今の時期から色んな高校と、専門高校は専門高校と、地域の近い高校は地域の近い高校と、色々な活動の共有をしていってこの先また再編っていうようなことが起きた時にお互いにその地域を盛り上げて引っ張っていく、引き続き引っ張っていくっていうような準備も必要かなと思います。ほんとは6人でこの子達は楽しいんだろうかっていうのがその現状を見た時の私の感想でした。やはり、人とにぎわって文化祭だって、体育祭だって大人数で皆とワイワイ楽しむのが高校生活かなって思います。皆で絆を強くするのももちろん大事ですけど、色々な喧嘩だったり、いじめがいいっていう訳ではないですが、やはりそういう辛い思いをしてこそ社会に出てからの力になるのかなっていう風に思いますので、是非その辺りもデメリットっていうところもしっかりと考えて検討していただけたらと思います。

【古閑教育長】

今出ました小規模校・少人数校のデメリットを今後、どう解決していくか。堀内委員の方から、一つのネットワークを作りながら地域で解決するとか、ま

た、ここに資料にもありますけども、ICTを上手く活用しながら、そういう環境の格差の解消を図っていくとか、そういう工夫をしながら、これまで委員の方々からのお話がありますように、いわゆる人口減少を前提とした小規模校のあり方、今後の県立高校のあり方について、またこれから皆さんの色々な意見を聞きながら、検討を進めていきたいという風に思います。何か事務局の方から、補足等ございますか。

【牛田指導局長】

失礼します、教育指導局長でございます。先程の話の中から、地域との連携・日頃からのコミュニケーション等ありましたけども、まさにそういう視点っていうのが、全国的に大きな必要性って言いますか、その事の重要性が言われておりました、文部科学省の方でも今年度から、地域と協働して高校教育を進めていくというモデル校の指定が始まっております。全国で20校の指定を受けましたけども、本県の上天草高校が今年第一号として指定を受けまして、今上天草市、それから行政だけじゃなくて、色々な産業界ですとか、町づくりのコーディネーターの方とか、そういった方々も一緒に学校に入っていて、そして学習指導要領にある教科じゃなくて、学校設定の科目っていう新しい科目を作りまして、毎週色々な取組みをしているところでございます。申請にあたっては、文部科学省のヒアリングに上天草の市役所の方も一緒に行っていたいて、文科省のヒアリングも受けて認められたという風な取組みが行われておりました、私も先日授業を1時間見せていただいたんですけども、地元の事を理解するための講座でしたけども、市の方がもうほんとに立派な素晴らしい資料を作ってきてくださいます。3人ぐらい市の方が来てくださって、子ども達に市の様子をしっかりと伝えてくださって、また子ども達もしっかり聴いていると。それ以外にも、地域の方とのワークショップの授業でしたり、色々なことを年間計画でやっております。そういったことが、お互いにお互いを知って、そして子ども達が地元の高校を選んだり、あるいはその高校の後、域外に出てまた戻って来るといふ風なことにつながるのではないかなという風に思っているところです。こういう取組みをまた他、県内各地で同じような悩みがありますので、そういったことに繋げていければという風に思っているところでございます。以上でございます。

【古閑教育長】

目指す姿の中に3つ掲げていますが、真ん中に地方創生と一体となったといった言い方をしています。木之内委員からお話がありましたけども、各市町村が抱える人口減少という課題はもう共通していますので、いわゆる一つの高校

を核として、地方創生に取り組むとか。まあ、牛田局長の方からもお話がありましたけども、そういった取組みをすでに始めておりますので、まあこれは少し県下全体に広めていければなという思いでおります。

あと、私立高校の方が頑張っているということでもお話があつてますが、私立高校はある意味、それぞれ個々の私立高校だと思います。いわゆる、点だと思います。ただ県立高校は、一つの県立高校としてのまとまりがありますので、そのネットワークとか、いわゆる線とか面でいわゆる県立高校の良さを、先程のその小規模校のデメリットを、線とか面をつなぐことによって解消していける部分もあるんじゃないかなというようなことも今後検討を進めていければという風に思っています。

【蒲島知事】

先ほど面という話が出て、確かに県立高校の強みはそこにあるなと。私鹿本高校に入ったときに、原口先生というとても考古学で有名な方が旧山鹿高校から転任されてきた。そして何が起こったかという、旧山鹿高校の考古学部と鹿本高校の考古学部が一体となって古墳の発掘などをして、とても良い環境だったと思うんですね。だからその特色のある先生が移られても、一緒にそういう部活等をするとか、あるいはなんかのチャレンジをするというのが、県立学校の方がやりやすいような気がしますね。そういう意味では、転任させるときにあんまり遠いところにやるとその面の特色が失われていくかも、点になってしまうんですね。だからそういう意味でちゃんと自分たちがどういう風な県立高校のネットワークを将来つくるかということも考えながら、今から考えとくんですね、それに対応できるんじゃないかなと思います。生徒たちはそういう先生を中心にまとまって、考古学を学んできましたので、そういう意味では財産としての先生の配置の仕方とても大事じゃないかなと思います。面と兼ねてね。

【古閑教育長】

はい。ありがとうございました。

【櫻井委員】

すみません。知事のお話で、地方創生と先生ということで、学校人事課はどう思ってるんでしょう。お聞きしたい。方針です。先生の配置の方針。

【磯谷課長】

学校人事課でございます。基本的な異動方針というのは、しっかり定めてそ

れを基本にしておりますけども、各学校・各地域の特色というのがございますので、十分校長先生をはじめ、またその関係する地域の声というのも学校長を通じてですね、確認をして、対応して参りたいと思っております。

【櫻井委員】

よろしく願います。

【磯谷課長】

先ほどのスーパーティーチャーのお話も、県下で今13名県立高校でスーパーティーチャーおりますけども、年齢がある程度高い先生もおられますので、その辺は再任用なり、再配置なりっていう形で努力して参りたいと思っております。以上でございます。

【古閑教育長】

それでは3つ目のテーマの方に一旦移らせていただきます。3つ目は「『夢』を支える～いわゆる専門家等と連携したいじめ・不登校対策の推進」ということでございます。それでは事務局のほうから説明をお願いいたします。

はい、それでは3つ目のテーマ「夢を支える専門家等と連携したいじめ不登校対策の推進」についてご議論いただければと思います。

※事務局説明省略

【吉井委員】

専門家との連携というのはとても大事な事だと思います。数字も出ておりますが、不登校の2,372人。2,000人を超えているというのは大変な人数だと思います。よく知事がおっしゃる言葉に「教育で貧困の連鎖を断つ」というのがあります。これには大変共感しております。確実にこの言葉は成果を上げていると思うのですが、逆に教育の現場が貧困の始まりになる場合があります。それが、このいじめと不登校です。2,000人を超える子どもが学校に行けず、本来学ぶべきことを学ぶことができず、結局学校を卒業しても働くところも少なくなり、貧困のスタートに立つ可能性があります。それは止めたい。それは何とか止めたいと思います。教育現場が貧困のスタートになってはいけないと思います。

今は学校安全・安心推進課が設置されまして、対応が早くなり、とても丁寧になって良かったのではないかと考えております。課の方には本当に重くて大変な仕事についていただいて感謝しかありません。そして、今いじめでは「ハ

づる」「ハブられる」というのが増えています。これは除け者にするわけではなく、ただ他の子と仲良くするだけみたいなのそんな感じのことなんですが、これが増えているのは、「いじめてるんじゃないの？」と聞かれても、「あっ気がつきませんでした」と言い訳ができるいじめなんです。ただこれが長く繰り返される事で、子どもは傷つき不登校になることがあります。いじめた方は「気がつきませんでした」と言いますし、親は学校が大事だということを知っていますので「勉強が遅れるよ」と言います。先生も心配して、学校においでと言います。それぞれの思惑の中で子どもは結局何も解決しないまま独りで苦しむ事になります。それぞれの立場で、一つのいじめに対しても感じ方が違いますが、まずは子どもの心が最優先ではないかと思えます。場合によっては、保護者、先生とも納得のうえで「休んでもいいよ」と言える環境、もちろんそれには勉強に関する事とかいろんなフォローが大切なんですけど、そういう環境が必要ではないかと思えます。子どもにとっては常に居場所がある、誰かと繋がっている、そういう環境あるいは相手があるところがいいところです。それは友人であったり、親であったり、先生であったりもするんですけど、近所のおじちゃんおばちゃんであってもいいと思えますし、そして、できれば自分と繋がるだけでなく、他の人とも繋げてくれるそういう存在であってほしいと思えます。

スクールロイヤーの導入も検討されているようで、実現すると思うのですが、それと同時に、いじめ担当の先生も配置ができないかと思えます。滋賀県の大津市に既に導入されているらしいんですが、学校の先生は担任の先生にしろ、養護の先生にしろ、全ての生徒さんに公平でなくてはなりません。ですが、クラスで孤立し、学校で孤立している生徒にとっては、その公平は公平ではないんです。味方がほしいのです。いじめ担当の先生はいじめられている子どもの味方になれます。そういった先生がいらっしやることで誰かと繋がっている、そしてその先生を通じて他の生徒と繋げてもらう。そういったことも含めて、このいじめ担当の先生の導入ができないものかと今は思っておりますので、これを検討していただければありがたいかなと思っております。以上です。

【古閑教育長】

はい。ありがとうございました。

【木之内委員】

ご質問と言うか不登校がだいたい2,000人ちょっとぐらいずついるということですけど、例えば色々カウンセリングをしたりとか色々な手を打ったことによって、登校できるようになったという生徒が例えば何パーセントぐら

いい、そこにまたずっと横ばいということは生まれてきてるのか、それともなかなかやっぱり解消できない問題になってるのか、その辺分かったら教えていただきたいんですけど。

【川浪審議員】

学校安全・安心推進課でございます。着座にて回答させていただきます。今御質問がありました不登校についてですが、市町村が設置します適応指導教室、そういったところに行かれています生徒さんであるとか、あるいは民間の施設でありますフリースクールと言われる所に、SC あるいは SSW の方々が御紹介とかされまして、そこから少しずつ学校の方に復帰できるよう、生徒さんたちに行動を促しているというところまでは把握はしております、実際学校の方に行かれていますかどうかというところまでは確認ができておりません。申し訳ございません。

【櫻井委員】

すみません、不登校の定義は何ですか。

【古閑教育長】

それでは、局長の方から。

【牛田指導局長】

統計上公表されるものは、30日以上欠席が長期欠席ということで、その中の理由を見ながら、病気が理由であるとか、経済的理由があるとか、そういったもの以外は不登校ということになります。具体的には、学校への不適應だったり、そういったものがあります。基本的には30日以上長期欠席の中の、その一部分という定義で国の調査も行われておりますし、そういう数字を出しているところです。それから、先ほどご質問がありました子どもたちについては、その後の復帰はちょっと私も持ち合わせておりませんが、先ほど申しましたように状況を見ながら、その原因がそれぞれありまして、その原因によって適応指導の教室につないだり、あるいは経済的な理由だった場合は今 SSW 等の配置も増えてきてますので、そういった方にも入っていただいて、色々な環境を整えるとかその状況に応じた対応をしているということで、いろんな事情や背景を解決して、学校に戻れるような環境を作っていく。ただ、御意見にありましたように、必ずしも強引に学校に繋ぐということだけが得策ではありませんので、そこは個別に、状況を見ながら、まさにいろんな専門家の方等と連携しながら、個別の対応をするという状況です。

【木之内委員】

ありがとうございます。もちろん経済的な部分ですとかそれぞれの色々な事情がある、そういう中でできるだけカウンセリングをして、母校に戻れるというのが一番理想だとは思うんですね。ただもし、ある程度固定的にかなり長期休んじゃうとか、なかなか精神的な部分で戻れないとか、こういう子がある一定の数をもしいるとしたら、この中がどういう割合だかわかんないんで、はっきりしたことはわかりませんが、やっぱりばかにならない数なんで、例えばそれがあある一定の例えば500人なのか、800なのかわかりませんがいるとしたらですね、やっぱりもう一歩踏み込んで、今は民間に任せたりということが多いのかもしれないけど、むしろそういう子たち対応の学校みたいなものも少し考えた方が良くないかなということもちょっと思ったんですね。まあできるできないは別として。それがなにかというのは、我々にもかなり不登校の親からの相談で預かってほしいというのがかなりの数、話があるんですね。現実には我々も今まで何人か預かったことがあります。まあやっぱり本当に行けない子達ていうのは場所が完全に変わる事でけっこう大丈夫になってみたりとか、うちでは高校卒業の資格をもう試験で取らせて、今大学行ってる子とか相談あった子の中に3人位いるんですね現実に。だから、そういうのはよく通信高校なんかを受け持っているような話も聞きますけど、ある意味これだけの数があるとそこをもう少しきちっと数値的なものも把握した上で、例えば、自然の中にあるような郡部の学校みたいなのところに特別にそういう部分を作っていくとかそういうことなんかもちょっと検討しても良いような気もするんですけど。特に我々の農業の部分なんていうと生き物相手にするんで、非常にメンタルの部分のケアには良いとか、あとはいろんな意味でそれで復帰していくというのはあるというのを我々聞いていますんで、何かそういう部分も検討してみるのもいいのかなという気がします。

【古閑教育長】

他はよろしいですか。

【堀内委員】

私も木之内委員の意見に少し似ているんですけど、不登校になる生徒というのは色々な背景があると思うんです。もちろんいじめだったり家庭環境だったり、あとはやっぱりクラスが変わってなんとなくクラスに馴染めなかったりとか、すごく自分に自信のある子が一回挫折を味わったことでそこから自尊心が回復せずについてというような、色々な背景があると思うんですけど、果たして色々な背景はあるとしても、不登校の子が必ずしも私も学校にきちんと戻らない

といけないのかなあっていうのは、とっても疑問に思うんですね。やはりその子が何故そういう風に不登校になったかっていうまず原因を探っていくことが一番大事で、それで結局その子がまた、新たに社会性を発揮出来るっていうか、社会の場で活躍が出来て初めてその不登校っていうのが克服出来るのかなって思うので、教育現場としてとても難しいとは思いますが、やはり、学校に来なくてもそういう子達がまた社会性を発揮出来るような、木之内委員がおっしゃるように、場所づくりだったり、情報ですね。

一番不登校になって何が大変って、親が悩むんです。いじめとかあとはいわゆるその家庭環境だっていう所は別として、理由が分からない、私達にも分からないけど学校に行かない。前の日は、「明日学校に行く」っていうけど、朝になるとお腹が痛くなって、頭が痛くなって行きたくない、行けない。親もとっても悩むんです。なので、そういう時に、やはり「色々な方法があるよ。色々な手立てがあるよ」っていうようなことを、親にも情報として流して子どもにもこういう方法があるんだ。だから、無理してって言い方は語弊があるかもしれないけど、「頑張りすぎずに。頑張っただけ学校に行かなくても良いんだ。」っていうような気持ちを持たせてあげるっていう事もとても大事だと思います。

今それこそ、「ホームエディケーション」って言って家庭学習っていうようなことも少しずつですけど広まってきています。そういう中で、学校と家庭が連携出来る場合は、そういう風な形で学校も家庭の中で何が出来るんだろうかっていうような情報だったりっていうのを発信していく事が大事なかなって思います。

それから、ちょっと一つ「愛のプラン1・2・3運動+1」っていう対応があるんですが、意外に、保護者の方が学校からの連絡が負担、先生から電話が掛かってくるのが負担っておっしゃる家庭のお話をよく聞きます。もちろん先生方はとても学校に出てきて欲しいっていう思いで一生懸命やられると思います。もちろんこの「愛の1・2・3運動+1」っていうのもとても効果を発揮している場合もあるかもしれませんが。やはりその家庭、家庭によって状況が違ってしまうので、その辺りはデリケートなところになってきますので、やはり学校でもケース会議って言うのを開催されているみたいなので、働き方改革とか言われてますけれども、大事な事にはやはり少し時間を費やしていただけるようにケース会議はなるべく多くというか、色々なケース会議が出来るようなそういう状況もつくっていただけたらと思います。

【古閑教育長】

はい、ありがとうございます。知事をお願いします。

【蒲島知事】

不登校の経験があるのは私だけじゃないかな。大事な事は、不登校になったからと言って、「高校とは縁が無い」と縁を切ることが一番悪いと思います。だから味方に常になってあげる。私は鹿本高校だったんですけども、24歳の時に急にネブラスカ大学に留学したくなって、結局そこで高校の先生が推薦状、成績証明書これを英語で書いてくれたんですけど、そういう意味では、24歳までコミュニケーションが無かったけれども、高校は見捨てなかったと。そういう存在がとても大事だと思いますよね。最後はそこに頼れるところがあると、そういう意味で昔の経験から言わせると、高校はそういう存在であってほしいなど、それは愛校心にもつながっていくと思いますし。それから、不登校でも急に復活できるケースもあるわけですね。私は、24歳で6年遅れて大学に入りましたが、そういう意味で、いつも言ってるのは、高校だけは出ときましよう。人生の復活劇で、高校がちょっと大事になってくるのかなと。だから高校が認める、そういう見捨てないような熊本の高校が大事だなと私は思いますので。以上です。

【古閑教育長】

はい、ありがとうございます。他はよろしいでしょうか？

【堀内委員】

最後にちょっと是非お願いをしたいなと思ってすみません。もう多分皆さんご存知の方もいらっしゃると思う『子ども六法』で読まれた方は事務局の方いらっしゃいますか？私もこれが話題になっていて読みました。ほんとにいわゆる法律の事が子どもに分かりやすく、振り仮名を振って分かりやすく書いてあります。それでこの帯の所にも書いてありますけど「いじめ・虐待に悩んでいる君へ」ということで、やはりこういうものが一冊あると、とても法律を身近に感じられると思います。

いじめられている側とか虐待に遭っている方もそうなんですけど、それをしている側も、ほんとに犯罪とか法に触れるっていうような思いでそういう事はしてないと思います。こういうことを読むことで、「自分のしていることが法に触れるんだ」というようなことがとても分かってくるような気がします。ほんとに是非クラスに一冊こういうものが身近にあると、これを全部読んで全部理解しろじゃないんです。「あ、そういえばこういう本があって、こんな事が書いてあったね」というのが頭の片隅にあると、何か困った時の助けになるんじゃないかなと思います。それで、これはもちろん子どもだけではなく、親にも是非読んでいただきたい。親子で共有していただきたい本だなと思っており

ます。私も最後になりますので、こういう本の紹介をする機会がないかなと思
ってすみません。今日はちょっと持参をしました。是非クラスに一冊って
いう検討をしていただけるように学校側の方にも情報として流していただければ嬉
しいと思います。以上です。

【古閑教育長】

ありがとうございました。他よろしいでしょうか？色々委員の先生方から知
事含めてご意見ございまして、学校側がやはり最後まで味方になるという姿勢
と、あと、学校だけでやっぱり解決が難しい案件が非常に増えてますので、表
題にありますように専門家とか、関係機関とか、まさに木之内委員がおっしゃ
った、民間の企業とか、そういったものを含めてですね、やっぱり社会で支え
る仕組みっていうか、そういったものもつくっていかないと、なかなかこの不
登校並びにいじめの対応っていうのは、非常に難しくなっておりますので、
そういった対応を今後しっかりと考えていければという風に思っています。あ
りありがとうございました。

それでは最後ですね、今3つのテーマでご議論いただきましたけれども、最
後は、もうまさにフリーのフリーということで、これ以外にも含めて何かお気
付きの点・もしくは、あの先程一枚紙10項目をちょっとお示ししております
が、そういったものも参考にさせていただきながら、最後お話をいただければと
いう風に思います。

【吉井委員】

じゃあよろしいですか？すみません。

【古閑教育長】

はい。

【吉井委員】

頂いた10項目の中の指導力の向上・スーパーティーチャーの増ということ
で、先程色々話は出たんですが、とてもありがたいなと思ったのは、再任用時
に遠くの学校にというか、小規模校に来ていただいて指導していただくという
のはとても嬉しい案だなと思いました。おそらくこれからスーパーティーチャ
ーさんは色々増えていくと思うんですが、その時に必ず「再任用の際は、ひょ
っとしたら小規模校に行っていただく可能性もあります」ということをお伝え
願いたいと思います。

それと、この指導力の向上ということなんですが、今ちょっと問題になって

まず神戸市の先生のいじめの件ですが、あの加害者側の4人の先生方皆さんとも指導力の豊かな先生だったそうです。だから指導力はとても大事なんですが、同時に、人間性もしっかり見ていただいて判断をお願いしたいなと思います。どうぞよろしくお願い致します。

【古閑教育長】

はい、ありがとうございます。せっかくですから最後にお一人ずつ。

【木之内委員】

そうですね、僕は、色々今まで教育のこと教員としても携わってきていつも思ってるのは、やっぱり教員自体のグレードアップ。ここが一つはキーになるなあと考えています。特に、今社会の変化がものすごく早いんで、やはりその今の社会っていうものがどういう風に動いてるのか。また、地域がどうなってるのかっていうのを、色々な意味で先生方に特に興味を持っていただきながら、常に教員自体も自分たちもステップアップするんだっていう意識を強く持っていただきたいなと思いますし、是非、もちろん教育センター含め色々な研修がされてることは重々承知してますけれども、色々な意味で社会性という部分について、是非そういう機会を増やしていただけたらなっていうのを感じております。そういったのは最終的に子ども達にどう繋がっていくかということになると思いますので、そんなことを考えています。

【古閑教育長】

はい、ありがとうございます。

【堀内委員】

そうですね。ほんとに子ども達が「熊本で学んで良かった」という風に見えるような県になれば良いなと考えています。ほんとに今日のテーマもそうですし、この重点10項目っていうものもそうですけど、これだけ子ども達をしっかり考えて、一人ひとりに対応していこうっていう子ども達に対する熱い思いが熊本の教育にはあると思います。なので、ほんとに子ども達が「俺、熊本で育ったんだぜ」と皆に胸を張って言える、そういうような教育に皆でしていきたいなと思いますし、私も今日で教育委員は最後ですけど、そういう風な所、一生懸命サポートしていきたいなと思います。

【古閑教育長】

では櫻井委員お願いします。

【櫻井委員】

櫻井でございます。1つだけ足すと、先生の不祥事が多発しているようには見えてるんですけど、でも熊本県は、他県と比べたらいけないのかもしれませんが、良い方ではないかなという気はしているんですが、でもやはり増えてるっていうので、やっぱり1つは教職員を新卒で採るということが、やはり問題だと私は思っております。制度としてはあると聞いてますが、やはり校長推薦によって、臨採で来た人を大体半年ぐらい一緒に仕事してるわけですから、半年仕事すれば大体人間性が分かります。そこを2、3割そういう先生達が入るようになれば、分かると思います。じゃないと、新卒で採るといった時は人間性まで分かりませんので。是非ですね、校長推薦という制度を活用して、そしてあるいは中途採用も入れてですね、先生があまりにも均一化してますので、もう少し。もちろん文科省からの流れがありますので、そんなにあまりにも変わった人はだめかもしれませんが、もう少し特色のある人を入れても良いんじゃないかなという風に思います。

【木之内委員】

ちょっと一つだけ良いですか。今ふと思ったんですけど、蒲島賞をずっと審査させていただいて、びっくりするぐらい県庁の職員の方が喜んでる姿をずっと見ているので、先日先生方の表彰があったのを、ここに知事いらっしゃるんで、是非年に一回表彰された先生方を知事公邸に呼んでいただくと、かなりモチベーション変わるんじゃないかなと。それと、やはり表彰自体がなかなか推薦が出てこないみたいな話もこの前の委員会でありましたんで、やっぱり何となくこういうそういうシンプルに目指すみたいな感じをもし宜しければ、お忙しいとは思いますが、招待いただければなんて思います。

【蒲島知事】

はい。今のご意見ですけども、私はいつでも。知事公邸で。ただ、確か最初、頑張る高校生の表彰をされるのを考えた時に、最初は、結局そういう差をつけたいいけないという教育委員会からの反応があったんですね。でも、あれやって良かったなって思うのは、ものすごく少ない投資で過大な・多大な成果があがっているんじゃないかなと思います。また同じように、蒲島賞もやった時にやっぱり人事の方は、積極的じゃなくて。何か差を付けることに。何か平等性っていう言葉にもものすごく皆さんは注目されるけれども、先程櫻井さんがおっしゃったように、やっぱり人物を見るときに、平等な試験でその平等な試験を受けた人が、正当性を持つというよりも、色んな考え方の人を人間性を含めて、やっぱり臨時採用の中にたくさん良い人がいると思うんですよ。残したりと

かもしてね、それを残せるような仕組みが必要じゃないかなって思います。

一番簡単なのは、テストで上位から採っていくとかですね。それは可能ですよね。平等かもしれないけど、社会ってのはそういうもんじゃなくて、もっと色んな対応力が必要なんじゃないかなと思うので、是非櫻井さんの意見も考えて欲しいと思うし、木之内さんの提案は、いつでも。知事公邸に皆で来てほしいと思うし。

それからもう一つですね、この10項目を見るとですね、平成26年3月の教育プランには、夢とか貧困の連鎖を断ち切るとかそういうのがあふれてるんですけども、これを見ると、この夢は新学習指導の夢実現案だからすごくその夢の矮小化っていうか、もう少し、本当の夢のある部門が必要かなとか。もう一度、6年前ですかプランを見ていただいて。そして、実務的な重点10項目になっているけども、もう少し夢があったり、あるいはさっき言った貧困の連鎖を教育で断ち切るとか。そういうのが蒲島県政の大目標だったので、その部分をもうちょっと考えていかないといけないなと思います。以上です。

【古閑教育長】

はい。では、他言い足りない先生方は大丈夫でしょうか？それでは一応時間の方も参りましたので、本日の教育総合会議はこれで終了させていただきます。

私ですね、知事から教育長に就任当初に国の教育再生実行会議に同行させていただいて、国の方のいわゆる教育の危機感といいますか、国の方は諸外国と比べてこれから日本の子ども達、また日本そのものが、どう立ち向かっていくかという事に対してやはり、今の諸外国に比べると、教育力がだいぶ落ちてるんじゃないかなという危機感を非常に特に経済界の方を中心に、おっしゃっておられました。そういう生の現場を拝見させていただく機会を与えていただきましたんで、これからの日本、もしくはこれからの熊本県をしっかりと支える子ども達の為に、我々がどういった取り組みが出来るかということ、また委員の皆様方と一緒に、また知事を含めてしっかりと、考えていきたいという風に思います。知事が最後におっしゃった夢の実現に向けてですね、我々も一生懸命取り組んでいければという風に思っております。それでは、事務局の方にお返しをさせていただきます。